

マスク緩和 変わらぬ姿

徳島駅前 着用者多く

新型コロナウイルス対策のマスク着用が個人の判断に委ねられるようになった13日、県内各地の交通機関や飲食店は利用者への着用呼び掛けをやめるケースが目立った。ただ、顧客の健康に配慮

客への呼び掛け停止 従業員には推奨

事業者大半は顧客に配慮

して当面は従業員に着用を求める事業者が大半。関係者からは「脱マスク」に歓迎の声が上がるものの、定着するまではしばらく時間がかかりそうだ。(2面参照)

徳島バス(徳島市)とJR四国(高松市)は政府の方針を受け、13日からマスク着用を呼び掛ける車内放送をやめた。しかし、両社とも駅員や乗務員のマスク着用と車内の換気、消毒などの基本的対策は継続する方針。

緩和されても急にはコロナ禍以前の風景には戻らず、この日朝に徳島駅で列車を降りた乗客はほぼ全員がマスク姿。そんな中、大阪から高速バスで帰省した阪南大1年の京野優士さん(19)はマスクを外していた。「気持ちも明るくなった。今後は感染対策をしながら、その場に応じて判断したい」と言う。

飲食店は来客増に期待を



マスク着用ルールが緩和された朝、マスク姿で通勤通学先へ向かう人たち＝13日午前7時50分ごろ、徳島駅。(山田旬撮影)

込める。阿波池田駅近くの「一福亭」(三好市)は、食事中以外のマスク着用を求める張り紙を外した。店主の松本浩治さん(63)は「人々の行動が活発になっ

てほしい」と願った。阿波銀行(徳島市)やマックスバリュ西日本(広島市)が展開するマルナカといった店舗では、来店者のマスク着用を各自の判断に

委ねる所がほとんど。ただ、阿波銀行は行員の着用は継続する方針。マックスバリュ西日本も来客対応の従業員の着用を推奨し、間仕切りや消毒液についても現状を維持する。一方、子どもを預かる施設は警戒感を緩めない。徳島市内のあることも園は職

員だけではなく、出入りする保護者にもマスク着用を求める。責任者は「春休みになれば、県外に出掛ける家庭も増える。子どもたちの命を預かる以上、クラスター(感染者集団)を防ぎたい」と強調する。小松島市の横須保育所は利用者のマスク着用を「個人

「少しずつ生活を戻して」 体調管理・行動に責任を

専門家

マスク着用ルールの緩和について、県内の専門家は「マスクのない日常を取り戻す第一歩として評価する一方、新型コロナウイルスに対する抵抗力を持たない人々への配慮を求めた。」

徳島大学院社会産業理工学部の山本哲也准教授(臨床心理学)は、話し相手の表情を読み取れないマスクが幼児の情動やコミュニケーションの発達を阻害している恐れがあると指摘し、「緩和は発達の遅れを取り戻す第一歩になる」と期待する。

「長期にわたる自粛生活で身体能力が衰えた高齢者は少なくない。緩和を機に対策をしながら外出し、少しずつコロナ禍前の生活をとり戻してほしい」。徳島大学の東桃代感染制御部長はそう歓迎する。毒性が強いデルタ株からオミクロン株に変わり、健康へのリスクが低減した新型コロナ

なを怖がり過ぎる必要はない」と言う。ただ、感染の流行が再び到来することも予想され、高齢者や基礎疾患を持つ人らにとつて脅威が消えたわけではない。東部長は「抵抗力を持たない人が多い医療・福祉関連施設でクラスターを発生させないこと、この3年間で大きく向上した県民の衛生観念を風化させないことが大切だ」と指摘し、体調が優れないときは知人のお見舞いを見送るなどして「自己の体調管理と行動に責任を持ってほしい」と訴えた。

(谷利彦)